

ハイデガーのシェリング解釈について

小田切建太郎（日本学術振興会）

ハイデガーとシェリング。この両者の関係、具体的にはハイデガーによるシェリングの『人間的自由の本質とこれに関連する諸対象に関する哲学的研究（*Philosophische Untersuchung über das Wesen der menschlichen Freiheit und die damit zusammenhängenden Gegenständen*）』（1809）に関する1936年夏学期講義と1941年夏学期講義（『シェリングの『人間的自由の本質について（*Vom Wesen der menschlichen Freiheit*）』）解釈をめぐる研究は国の内外を問わずこれまでたびたび試みられてきた。それは就中前者の講義が、重要テキスト『哲学への寄与』（1936-38）との成立時期の近さからハイデガーの後期思索へのシェリングの積極的な影響関係を明確化できるのではないかという希望を抱かせるからである。しかしながら同時につきのようなハイデガーの解釈とシェリング自身の自己理解の重大な差異が指摘されつづけてもきたことも知られている。シェリングが「無底 *Ungrund*」を『自由論』の「研究全体の頂点」（SW 7, 406）とみなすにもかかわらず、ハイデガーはこれに特段の主題的論及をほどこすことなくむしろ「根底 *Grund*」と「顕存 *Existenz*」の「区別」に『自由論』の核心部を見定めようとしているということである（この相違を最も深くかつ鋭く剔抉した研究者として日本の大橋良介（「シェリングの無底と体系——ハイデッガーの解釈との対決」）が挙げられる）。本発表の目的は、こうした従来の研究が示した両哲学者の布置をいまいちど改めて問いなおすこと、あるいはそのための新たな眺望を切り拓くことにほかならない。

まず1936年講義におけるそもそものハイデガーの解釈の特徴及び意図を再確認する。ハイデガーは、『自由論』を人間的自由の本質に〈関する *über*〉ものではなく、その本質に〈ついでに *von*〉ものと解釈する。ここでの思索は自由のものである——自由に属するものである。これは同講義の冒頭で示される「「指標命題：自由は人間の特徴ではなく、人間が自由のものである（*Merksatz: Freiheit nicht Eigenschaft des Menschen, sondern: Mensch Eigentum der Freiheit*）」（GA 42: 15）に対応する。ここに示されているのは、人間が自由（*libertas*）をもつとするヒューマニズムの転倒にほかならない。人間に属する自由ではなく、人間がそこに属する自由こそ問題なのだ。これを踏まえて、シェリング解釈における「直接的な意図」（GA 42, 6）の説明も読まれなければならない。曰く、その意図とは、「人間的自由の本質と、それゆえ自由への問いを把握することである。これによって哲学の最内奥の中心 *die innerste Mitte* が知へもたらされる」（GA 42, 6）。問われているのは、自由の本質であり、これは「哲学の最内奥の中心」である。ハイデガーが『自由論』の核心と

見なすのは、この自由、最内奥の「中心」である。この「中心」はここでは単に慣用的言い回しと見なしてはならない。そこに人間が帰属する「中心」というある種の場所に 20 年代のハイデガーがすでに注目していたことは H.-G.ガダマー（1900-2002）の証言から知られる。Ph.シュヴァープらの検証によれば 1927/28 年冬学期（ガダマー自身の記憶よれば 1925 年）の「ある日、彼 [=ハイデガー] はシェリング・ゼミナールでその一文を読み上げた。「生それ自身の不安は人間を中心から追い立てる」[SW 7, 381]。そして言った、「深さにおいてこの一文に比肩しうるヘーゲルの文章をただのひとつでもわたしに挙げてみたまえ！」と（Gadamer）。大橋も述べるように、『自由論』のなかで「中心」と「周辺」の語群と最も緊密な仕方で登場する名前は F.バーダー（1765-1841）であり、その場合、彼を通じた J.ベーム（1575-1624）が問題となる。この場合「中心」と「無底」は、バーダーを紹介したベームの神智学、キリスト教からの影響のうちに見定められることとなる。キリスト教がハイデガーの由来のひとつであることはたしかである。また最初期ハイデガーはキリスト教的生経験に論究してもいる。しかしその際に問題だったのはキリスト教の神や三位一体などの神学問題ではなく、生（の事実性）であった。なにより『存在と時間』直後のハイデガーはすでにキリスト教から単に遠ざかっていたのみならず、形而上学構想を通してギリシアへ向かう別の道を本格的に歩み始めていた。ベームがギリシアとまったく無関係かは別として、少なくとも彼によって示される方向をハイデガーが迂遠な路と判断するのは当然である。ハイデガーの「中心」の語への注目が示すのは、大橋が（バーダーを紹介した）ベームからの影響と見なす「中心」の問題のうちにハイデガーはキリスト教・神智学ではなく、むしろギリシアを見ていたということである。本発表ではこうした事情を踏まえたうえで、ハイデガーがシェリング解釈の背景として持しながらも、かならずしも際立った仕方で強調しないギリシア的背景をこちら側で殊更に展開する。これによりハイデガーのシェリング解釈の隠された背景を明示し、そのハイデガーの行ったシェリング解釈及びシェリングに関する研究のための新たな視点を拓くことを狙う。

[以上、1985 字]